

二〇二五年五月二七日

歴史文書資料室主催 歴史サロン花畑 歴史講座

「観光と甲いのはさまー熊本県内の精霊流し」配布資料

@桜の馬場城彩苑総合案内所二階 多目的交流室

1 精霊舟流しとは？

(1) 近世文献資料

① 守貞謾稿

昔は蓮葉麻殻以下魂祭の諸物を川に流せしと也、中古以来大坂にては或比丘尼等より官に請て大坂中諸所に小舟を廻し一町限諸戸より十五日晩には辻番所に集之、右の小舟に送ることとなりぬ、此魂祭の雑物、皆各所用ありて値となし、其尼寺一年の費に足ると也又江戸にては十六日の朝近在の小百姓等も小舟を諸川岸につなぎ市中を巡り「精霊さまおむかひおむかひ」と呼び来る、此時棚の雑物を下し敷たる真菰に包み十二銭を添て与之、蓋舟を廻すと市中を巡ると同人には非ず、市中を巡るは困民なるべし

喜田川季荘 著 ほか『類聚近世風俗志・原名守貞謾稿』下巻、日本図書センター、1977年 287頁 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/12280681>

② 諸国風俗問状答

秋田県横手市(七月一六日:「送り火迎え火の事」)

一町に一つづつ船を葭簀にて造る、長さ三丈余大なる灯籠を石塔の

形に造り、三界萬霊と書て真中に据え、外には灯籠もなく、只蠟燭

を数百丁船の四面へ灯して町々を練り行き、蛇の崎と申す所の橋の河原へ持出し、太鼓うち囃し立る、此船十ばかり出る也。果ては其の川へ押し流すにて候

※参考 同地「施餓鬼の事」させる事なし、船にて出る等の事もとより候はず

③ 長崎見聞録(長崎市)

藁にて船を作り、生霊を祭りたる種々のものを皆積み、此船にも小きぼんぼりを多く掛つらねて持行、大きな船は一、二間もあり、人十人も二十人もかかる、また貧家の船は小さく、一人にて持ちたるもあり、大波戸という海浜にて火をつけ押し流す、その火海面にかがやきて流れ行くさま夥しき也

広川獬『長崎見聞録』(国文学研究資料館所蔵) 出典国書データベース, <https://doi.org/10.20730/200021765>

2 熊本の精霊舟流し 分布

(1) 分布

別紙「県下精霊舟流し伝承地一覧図」

3 熊本の精霊舟流し 歴史

(1) 近世文献資料

① 天草風俗(天草市天草町高浜)

盆供・たま祭の事

仏だごに、まごも又は萱のあらごもを敷て、御膳供物は大体豆腐・午房・人参・椎たけ・そふめん・心太・団子・五穀の類多くは初ものを供。又送火は藁にて船を作り、梶をつけ、紙の帆かけ灯籠をともし、海に送る。家にもあり。迎火といふはなし。墓所に火をともし也。

熊本県立大学日本語日本文学研究室「天草風俗」『熊本文化研究叢書7 近世天草風俗資料集』

② 風土行事書上帳(天草市天草町高浜)

七月十三日より十五日迄先祖之霊祭二付、十三日より霊屋を掃除仕、其夕方より十五日夕方迄霊膳香花等備申候、水ノこと申口此程二茄を切る器二入、水ノ初穂ヲ備、礼拝毎二右をほかひ候而三拝仕申候、霊膳箸麻二而致申候、十四日十五日両日ハ親縁身寄之者ハ相互二位牌参仕、十五日夕方より先祖之墓所え参詣霊灯を明シ申、又其日より藁二而舟を造置、夜半ノ頃二精霊流シと唱へ霊前へ備物を右之舟へ積、香をたきて海中へ流シ申候

熊本県立大学日本語日本文学研究室「風土行事書上帳」『熊本文化研究叢書7 近世天草風俗資料集』

(2) 新聞資料

① 熊本新聞 明治一六(一八八三年)七月一七日

午後十時頃までは左程流し手もなかりし処、十一時過ぎになりては続々灯籠を持来りて白川に流し、細工町尻塘辺は見物人もいと多

かりし、右に付可笑しき咄あり、(中略)前夜の灯籠流の精霊船には程々の供へ物あるより、そを取らんと石塘の下より手を延して供物を取らんとするはづみに、水中に這入り頭部をいたく負傷せしといふ

② 紫溟新報 明治二二(一八八八年)八月二九日

去る廿二日は旧暦の七月十五日に当り川尻町の旧慣として、夜十時比より精霊様見送りとてスツチャラチャンと三味線太鼓の騒ぎ船、加勢川新橋の上下にボツボツ浮ひ出で、初めは一ニ隻尋で三四隻五六隻仕第次第に輻輳し、三味線太鼓の音は唄声水声と和し、縦横に操廻し、その中には麦わらや菰或は板にてこしらへし幾多の精霊船は、各々数百箇或は数十箇の蟬燭を立錐形に立て列ね、極楽丸とか南無阿弥陀仏とか記るせし小旗を靡かし、中には屋形船蒸気船に模造せしもあり、橋上下左右より続々流れ来り数十丁一直線に互り遠く見れば千百の星斗燦爛として来るが如く

4 熊本の精霊流しの展開

(1) 新聞資料

① 九州日日新聞 明治三三年八月一日

一昨日は旧暦十五日乃ち盆会の霊送りと云ふへき日にて、飽託郡河尻町にては例によりて灯籠流の奇観あり、全町各戸は孰れも意匠を凝した灯籠流の準備に着手し、例年は何時も午後十一時半頃より霊送りを為す由なる(略)紳士佳人の扁舟を浮べて三味線太鼓に興せらるゝ人もありて街上より高く叫べるヤンヤンヤの賞声と川中

より湧き出づる絃声と相交りて喧噪云はん方なし又時々加勢川の  
兩岸より打出す煙火の彩影に流石の河尻町も此に一夜の春を見る  
に至れり斯くて万人をして賞歎せしめ(後略)

② 九州日日新聞 明治四三(一九一〇)年八月一七日

肥後名物の一つなる川尻町の精霊流は、十五日午後九時頃より最  
と盛大に行はれたり、ことしはカンカン照着る好天氣に黄昏頃から  
曇り出し、十日の月も光を収め風さへ全く止みたれば精霊流の見物  
には詠向の日和なるより、市内は更なり近郷近在の老若男女は隊  
をなして繰込み来り、殊に夥しかりしは午後五時より九時に至る川  
尻駅着各列車は何れも溢るゝ計りの人を吐出し、駅前より精霊流の  
現場たる加勢川鉄橋に至るの間は押すな押すなの混雑(中略)同八  
時頃になれば、兼ねて同町有志が丹誠を凝らして作った十数発の烟  
花は轟然たる響と共に空中に花を散し、仕掛物は水上に錦を曳き  
喝采の声湧が如く、九時頃になれば正中嶋より待ち設けた精霊船  
は、或は山形或は家形其他色んな者に象り、提灯を下げ、灯籠を吊  
し、色紙を飾り題目経文等を書いた大小各種の旗を樹て、昼を欺く  
無数の蠟燭を立連ね、一艘二艘三艘許り花かと許り押出したかと  
見間に、次第に増して、忽ち数百艘の多に上ぼり、一艘何れも二三  
名乃至七八名の壮漢が、之を守りてわいわい曳々声にて水中を縦横  
無尽に押廻はし、火光水に映じて碎け、金波銀波利那に湧き利那に  
消ゆる美観壯観言語を絶したり

③ 九州新聞 大正五(一九一六)年八月一日

古来肥後名物の一に数へられ居れる飽託郡川尻町の精霊流しは例  
年の如く来る十五日を以て執行の事に決定せり、川尻町に於ては町  
民有志等相計り大正二年より従来のものに改良を加へ、船の構造は  
固より音楽、読経の裡に尤も莊嚴なる精霊流しを挙行し、初め同  
町御蔵前及び外城町係りの加勢川打揚げ鉄橋下を徐々として流す  
事となり居るが、尚ほ観覧者の興味を添ふる為め薄暮より煙火打  
揚數十発と加勢川畔には仕掛火花数台を点火する事とて、同夜の  
壯観は言語に尽し難き程なるが、本年は例年より一層新趣向を凝  
らして土地繁栄に資せんと各町共に熱心に精霊船の構造に奇抜を  
競ひつゝ有り、尚当夜の首船としては大仕掛の百八灯を点じ先帝陛  
下の御霊を慰め奉らんとて同町民一般より製作し、同船に同町各  
寺院住職の読経奏養寺組の奏樂にて順次数百艘の精霊船を一行に  
長し其間に県下有名の各商店の行灯広告を五十本行列せしむる計  
画を立て、広告募集を開始する筈なる

④ 九州日日新聞 大正五(一九一六)年八月一五日

明十五日の熊本県飽託郡川尻町の精霊流しにつき、町内にては観客  
に対し満足を与へんと数日来種々目論見居るが、例年は松本某が主  
となり、同町有志より応分の寄付を集め、其金にて読経音楽煙花等  
の催しを為し来りしも本年は町民全部の希望により煙花業者中川  
亀次郎氏主として余興其他の事に尽力することとなり、寄付金は既  
に集まりたるを以て、打揚煙花仕掛煙花とも例年以上に珍趣向のも

のを下さんと意気込み居れる

⑤ 九州日日新聞 大正三(一九一四)年八月一七日

玉名郡高瀬町唯一の賑日にて、以前は単に真宗以外の他教徒が僅に初精霊を流せしに過ぎざりしが、本年は町会の議決に依り町繁栄の一策とありて各町精霊船を流し、煙火仕掛物を造りて觀衆を喜ばすと云ふ趣向にて、各町は数日前より我れ劣らじと意匠を凝らし、軍艦飛行船に屋型船など大きは三間乃至二間半余の藁船を造り、満船飾鮮かに町口に飾り立て十五日午後九時半煙火一発を合図に、多数の青年船を擁して町口を練り大橋の上手に集合十時第二発の煙火を合図に船流しを始めしが、船には幾十の燭を点じ妙法蓮華經南無阿彌陀仏と幾百の彩旗風に翻へりて流れ行くさま美し、聽て更に火を放ちて焼き尽す時炎焰波に影じ壯絶の氣漲り煙火は絶えず中天に轟き下りては波に映ずる時、觀衆の喝采拍手は天も破れん計りなり、露店は軒を並べ十時頃に至りては町内より大橋付近公園にかけては押すな押すなの大雑沓、大橋向ふの堤防付近から河原迄も人を以て埋めたり

⑥ 九州新聞 大正二三(一九二四)年八月一八日

例年人吉町の精霊流しは年中行事の一として数へられてあるが、本年は天氣の晴好なりしと、農家の潤ひ順調なりしとに依りてか、世の不景氣は何処吹くかといふ有様で近郷近在よりの人も殊の外多く、午後九時頃よりは大橋付近は殆んど人を以て充され肩摩載

撃通行も出来ぬ程であつた、予報の通り本年は町内各寺院後援の下に大施餓鬼会行はれ清水氏が主催者となつて煙火大会が催され、昼間五十発夜間五十発の打揚の外ナイヤガラ瀑布、金魚、連発等の仕掛物が殊に見事にて美觀言ふ可らず、午後十時半頃より精霊舟は織月城下木山が淵の下端、水の手を渡し及び梅花の渡し場より流し出され、万灯燦然として水面忽ち花の海と化し其壯觀何とも名状す可からず、そゞろに亡者の精霊を慰藉するに足るものがあつた、就中重立つた精霊船は河内屋本店、牛島箆笥店、淵田焼酎屋、岩崎自転車屋、山部箆笥店、八木茶店、坂口陶器店、市花、高山、鶴田、河内、竹下等の各商店が殊に見物であつた

⑦ 人吉新報 大正二四(一九二五)年九月一三日

水上村岩野の盂蘭盆会の精霊流しは、去る三日は丁度旧曆七月十五日に相当し、午後十一時岩野橋下に於て盛大に執行せられた。其日は黄昏頃より、同地有志松下孝治氏等の斡旋にて仕掛花火の催しあるとの評判高く、隣村湯前村、黒肥地村、江代湯山、川内辺りより、老若男女の觀覽者続々と集まり、湯前村よりは染田組芸者連の美人の二〇加手踊乗り込み景氣を添へた。午後七時頃には、早く横手明治屋旅館裏座敷の舞台にて湯前美人連は太鼓三味線にて賑合ひ、俄か手踊り、端唄安來節、飛込みとして独流浪花節東球山は一席講演した。午後十時頃には、岩野橋畔には数発の煙火は打揚げられ橋上や両岸は觀衆にて埋められた、まつ間程なく盛装を凝した数多の美麗な精霊船は、川下へと流されて、打揚げ花火は空に時な

らぬ花を見せ、間もなく当夜第一の呼物たる仕掛花火の美観云わん方なく観衆の歓呼の声や拍手は割るゝばかりであつた。精霊船の花火と、打揚花火仕掛花火にて、水清らかな川内川の水面は赤く輝き渡り、岩野橋畔は火の世界の観があつた。観衆は隣村より多数押かけ殆んど三千人を突破する程の賑合ひで、午後十二時頃終り盛會裡に各々散会した。岩野の精霊流しは、郡内にも有名で、実に入吉に次ぎ年々賑合ひを増して行く観がある。之同地有志の後援よろしき為である。

⑧ 九州新聞 大正一二(一九二三年)七月一八日

鹿本郡山鹿町の盂蘭盆会は毎年七月十五日に行はれるのであるが、今年も例に依つて来る十五日行はれ、町内は墓参の人で人波を打ち各墓地は無数の提灯で美観を呈した、夜間精霊流しあり、精霊船は五十余に達し之等は僧侶の読経に連れて山鹿橋の上流に担ぎ出され船には無数の提灯、蝋燭に点火され僧侶の読経ありて河中に持ち出し思ひ思ひに趣向を凝らした仕掛花火は水に映じて壮観を呈し爆竹の音絶え間なく、斯くて漸次河下に流され、同日は夕刻より此の美観を見ん物と近郷近在より蝟集したる見物の群衆は万を越へ、山鹿橋の両岸は人垣を造つて雑沓を極めたので山鹿警察署では署員を督励して橋の危険を警戒した

6 精霊舟流しと私たちの暮らしの未来

(1) ①湯川洋司「村の生き方」『日本の民俗6 村の暮らし』吉川弘

文館

毎日を生きたるためには、実在する具体的な場がなければならぬ。(中略)端的にいえば、「自分の魂のかえる場所」がいるのではないだろうか。そこが生きる場であればそれに過ぎた幸福はないし、たとえそれが毎日を生きる場でないとしても、そのような場を暮らしのなかに確保できるならば、それもまた幸福であろう。そのような場所をいっさい持てないとしたら、どうであろうか。今の日本人に、「あなたの魂のかえる場所はどこですか」と尋ねたら、どんな回答が得られるだろうか。

(中略)「魂」という言葉をどう受け止めるかにもよるだろうが、「かえる場所」とは自分との「きずな」(結びつき、関係のありよう)として自分が大切にする何かを意識させられる場と考えてみたかどうかだろうか。(中略)もしもそのような場がないのだとしたら、死ぬば自身の魂は消えると、私たちは考えるほかないのではないか。いや、具体的な場などなくとも魂は生き残るという考え方もあるかもしれない。そう決意することはできるとしても、なお一抹の不安に襲われるのが人の生というものではないか。みずから力を尽くしてきたことがらが次の時代へ継承されることなく潰れる、また自分の魂自体も消えてなくなるといふ事態や思いに直面するときに、私たちは漠然としたものであつても生きていくことへの「不安」に襲われるのではないか。そこからの救いを思い願う心に応えてくれるものの一つが、「村」のもつ性質に結びつくのではないかと思う